

小学校・中学校社会科における縄文時代の研究

中嶋 俊平

1. 論文の構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 縄文時代の考察

第1節 縄文時代の定義

第2節 学習指導要領での記述の変遷

第3節 教科書での扱い

第4節 学習指導要領・教科書の問題点
に対するアプローチ

第2章 北海道・北東北の縄文遺跡群の考察

第1節 北海道・北東北の縄文遺跡群の
特徴

第2節 北海道・北東北の縄文遺跡群の
教育的意義

第3章 北海道・北東北の縄文遺跡群を
活用した社会科授業の提起

第1節 縄文遺跡を活用した授業実践の
分析

第2節 授業の提起

終章 研究のまとめと今後の課題

第1節 研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献・論文・URL

2. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

本研究を行うにあたっての問題の所在を
三点述べる。

第一の問題点は、まだ縄文時代そのもの
が全て明らかになっていないため指導者や
教科書によって学ぶ内容が異なることが挙
げられる。遺跡や採掘物の研究は進んでい
るが、縄文時代での農耕の有無・何年から
何年が縄文時代なのかが明らかになってお
らず、また採掘物のない地域ではその地域
がどうなっていたかは他の発掘された地域
から類推することしかできない。

第二の問題点として述べるのは、縄文時
代は「人物学習」が、日本では縄文時代の
特定の歴史上の人物が存在していないがた
めに行うことができず、また中学校での授
業においても、資料として物的資料しか存
在せず児童生徒に伝えられる情報が限られ
、物的資料となる土器なども貴重なため結果
として授業の方法が限られたものになって
しまう点である。

第三の問題点として、現行の学習指導要
領の指導計画の作成と取り扱いから身近な
遺跡を用いた授業が望まれることが分かる
が日本の縄文文化の中でも地方によって違
いがあるため教科書の縄文文化と自分の地
域の縄文文化に違いが生じる恐れがあるこ
とである。

以上の問題を踏まえた上で、私が提起し
たいのは北海道・北東北の縄文遺跡群を授
業で活用することである。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、今まで縄文時代や弥生時代が歴史学習においてどのように扱われてきたかを明示し、児童にとっての歴史学習のはじまりとなる単元をどう取り扱うべきか考察した上で、児童が歴史を身近に感じ、自分たちの近くの遺跡から様々なアプローチを通して幅広い認識・能力を身につくような授業を提起することである。縄文時代や先史時代は当時の文献が残っているということが少なく、考古学から事実が発見されていくため、事実が過去にも新しい発見があるたびに書き換えられてきた。中には旧石器ねつ造事件といった負の面もあるがそうした中で縄文時代は歴史学習においてどんな扱われ方であったのか、1947年に社会科が創設されてから過去の8回の学習指導要領の変遷でどんな課題があったのかを見つけ出していく。学習指導要領の変遷に伴い、社会科の教科書にもその都度、記載内容の変更が行われており、学習指導要領だけでなく教科書の変遷も取り扱う。変遷を提示した上でこの教育アプローチでいいのか、学習指導要領通りでいいのかということにも触れる。また北海道・北東北の縄文遺跡を授業の題材にするにあたってそれらにはどんな教育的意義があるのか、またその特徴を見いだす。調査にあたっては筆者自身も北東北のみではあるが遺跡現地に赴くこととする。北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群は世界遺産の登録を目指しているため、これからの時代を生きる児童たちにはその存在と授業で扱う意義をぜひ理解してもらう必要がある。遺跡といっても様々幅広い遺跡があり、授業で扱う

ことができる遺跡というのはどのようなものなのかも調べていく。

調査の後、遺跡を活用した授業にはどのようなものがあったのか授業実践例を調べ、分析し、北海道・北東北の縄文遺跡を活用した授業実践を提起する。

3. 論文の概要

(1) 第1章

第1章では縄文時代の考察を各節毎に視点を変えて行う。

第1節では現在考古学において縄文時代についてどのように発見され、農耕や定住や交易や身分格差や争い、どんな遺構が見つかっているのかを記述したうえで、この論文で扱う縄文時代とは何年から何年までの年代なのか、いったい何であるのかを以下のように定義づけた。

紀元前 14500 年前から 13000 年前の間から紀元前 1000 年から 800 年の間

縄文土器が出現し、人々は定住をしながら狩猟や採集や農耕・祭祀を行い始めた時代

第2節では前節で明らかになった縄文時代についての情報をもとに過去の学習指導要領を小学校・中学校両方すべて分析し、現在の学習指導要領での縄文時代に対しての問題点を明らかにし、第3節では現在小学校・中学校で使用されている教科書の分析を行う。各社の記述内容を表にまとめ、一覧にするとともに、各校種の教科書の問題点を挙げた。

第4節では学習指導要領・教科書の問題

点に対してのアプローチを述べた。

小学校・中学校両校種の指導要領に共通している問題点は三つあり、一つ目は縄文時代と弥生時代の違いが不明瞭であること、二つ目は縄文時代の記述が十分でなく定住・祭祀も今現在縄文時代に縄文人が行っていたこととしては明らかになっていることでありそれらが記述されていないこと、三つ目はそれらのことにより教師・教科書によって指導内容が異なってしまうということである。

三つ目の問題点である教師・教科書によって指導内容が異なってしまうという問題点は、一つ目と二つ目の問題点を解決することで教師や教科書が児童生徒に教えるべき内容が定まり、解決するものとする。一つ目の縄文時代と弥生時代の違いが不明瞭である点については縄文時代と弥生時代という言葉が指導要領上に記述し、その上でそれぞれの特徴を理解するといった記述にする必要がある。またその際にこれからの研究で事実が変わる可能性があるということも教えることも必要であるとする。二つ目の問題点に対しても、以下の共通のことがいえる。それは遺跡の調べ学習をする際は可能である限り遺跡現地に向かい、学習することが求められる。その理由としては実際に遺跡に行くことで資料が実物となり、体験的に学習することができるとともに、遺跡に隣接もしくは近接する遺跡の施設に行くことで学習指導要領上に記載されていない定住や祭祀についても学ぶことができるからである。そういった遺跡や施設が付近にない地域では北海道・北東北の縄文遺跡群を例として取り上げ、遺跡とともに施設の様子を児童・生徒に学ぶことで

学習指導要領に記載されていない縄文時代の事実について学ぶことができる。また、北海道・北東北の縄文遺跡群以外の地域では自分の地域の縄文遺跡との共通点・相違点を学ぶことでより理解が深まると考えられる。

小学校・中学校の教科書記述に対する問題点は二つあり、一つ目は小学校で使われている教科書の縄文時代の記述を見ると当たり前ではあるが各社異なり、児童が学ぶ量に差が生じてしまうこと

二つ目は中学校で使われている教科書の縄文時代の記述を見ると小学校同様、各社で異なっており、縄文時代の定義として狩猟や採集が行われていたことや縄文土器が使われていたことは含まれているものの定住や祭祀が行われていたことが含まれておらず、それに付随する遺跡や資料の掲載が少ない、もしくは全くないものがあるということ。小学校よりも詳しく記述しているが児童が学ぶ量や内容に差が生じてしまうことである。

学習指導要領の問題点にも関連しているが、教科書に記載されていない内容を実際に身の周りの遺跡・施設に行き学習することで児童生徒にそれらが何のために存在していたかを想像させ、縄文時代への関心を高めたい。こちらもそういった遺跡・施設がない地域の児童生徒に対しては北海道・北東北の縄文遺跡群を資料として提示し、遺跡・施設がある地域の児童・生徒に対しては北海道・北東北の縄文遺跡群と比較してより学習効果を高めたい。また調べ学習として自分で出土物や遺跡などをまとめたオリジナルの教科書をつくとより効果が高まると考えられる。

(2) 第2章

第2章では北海道・北東北の縄文遺跡群についてそれぞれの遺跡の特徴を写真とともに記載し、その教育的意義について述べた。

第1節では北海道・北東北の縄文遺跡群のそれぞれの遺跡の特徴について述べた。

第2節ではユネスコ世界遺産センター世界遺産暫定一覧表の記載内容と合わせて北海道・北東北の縄文遺跡群の教育的意義について述べた。

「概要」の前半部分では縄文遺跡の価値を、後半では特に北海道・北東北の縄文遺跡群の希少さについて触れられている。

「顕著な普遍的価値の根拠」では遺跡の持ちうる価値について述べられている。「真実性及び／又は完全性に関する記述」からは教材として扱う際に大切な真実性が保持されていることや縄文文化を扱う際に十分な要素が遺跡群に含まれていることがわかる。世界遺産登録に対する価値を述べているとはいえ、世界とは異なった日本独自の縄文文化の中でもさらに特徴的な北海道・北東北の縄文文化を学ぶということ・約一万年という長い縄文時代を学ぶことができることは教育的意義に十分通ずるものがあると筆者は考える。

北海道・北東北の縄文遺跡群特有の文化は、北海道・北東北に住む児童生徒はもちろんだがそれ以外の地域に住む児童生徒も北海道・北東北の縄文文化と自分が住む地域の縄文文化との共通点・相違点を見つける学習をすることで知識がより深まることが考えられる。またそれを調べ学習とすることで多面的・多角的な学習ができると考

えられる。

またそれぞれの遺跡に隣接もしくは近接した縄文遺跡について学習できる施設がある場合もあり、その施設で発掘物を見学することができたり、ワークシートを使って学習することができたり、縄文人の模型などから縄文時代の生活を疑似体験できたり、実際に縄文土器をつくることのできるものもある。これらの施設も併用することでより多面的・多角的な教育的アプローチを見童生徒に行うことができる。

(3) 第3章

第3章では雑誌『歴史地理教育』で掲載された縄文時代の授業実践を分析し、特徴と筆者がその授業を行うと仮定した際に変更する点を述べ、それをもとに北海道・北東北の縄文遺跡群を活用した授業及び単元計画を提起した。

授業実践の分析から学んだこととして、筆者が考える縄文時代の定義に含まれる縄文時代の要素である縄文土器・定住・狩猟・採集・農耕・祭祀を1時間で扱うのは困難であるため、単元計画を構想する必要があることである。すべてを網羅するためには単元を通して学ぶ必要がある。したがって単元計画、それに伴う授業を構想した。

次に単元計画に基づいた授業について、より詳細に記していきたい。1時間目は教科書に記述してある縄文土器・狩猟・採集といった縄文時代の基本的な事項について学習する。2~3時間目は連続して行い、実際に地域の遺跡・施設に赴き、見学や出土品の観察や土器づくりなどの体験活動を通して、縄文時代について体感的に学習する。4時間目は地域の遺跡と北海道・北東北の

縄文遺跡群を比較して縄文時代に対してより理解を深める学習をする。これらの学習を通して縄文時代の理解を深めるとともに、歴史学習に対して教科書に書かれていることや教師の発言に受け身で学習するのではなく、自ら積極的に調べるといった、攻めの学習姿勢を身につけてもらいたい。以上が筆者構想の単元計画及び授業の内容である。

4. 今後の課題

本研究を通してわかった今後の課題について3点述べる。

一つ目は歴史を変えるような発見が起きた際の教師の反応である。それまでに教えてきた内容が嘘になってしまうわけではないが、異なる内容になってしまい、児童生徒にどのように伝えるのがとても大切になる。特に縄文時代はまだ日本に文字というものが存在せず、未だ判明していないことが多く、縄文時代と弥生時代の境目がそれに代表される。現在使用されている教科書でさえ、年代表記が誤ったものになっており、これからの研究でまた新しくなる可能性があり、教師は児童生徒に歴史はあくまで後世の人間が資料から推測してつくっているものであることを伝えていく必要がある。

二つ目は遺跡などを扱う際に現地調査を行う大切さである。筆者自身も青森県・岩手県・秋田県の三県の縄文遺跡には調査を行ったものの、北海道にはいくことができなかった。実際に遺跡に行ってみると写真通りではなく公開をしていない遺跡や私有地の遺跡もあったり、現地の雰囲気を実際

に行ってみないと表現できないが、行くと確かに何かを感じたりする遺跡もあった。これから実際に児童生徒に教える際には今回行くことができなかった北海道の縄文遺跡を含めてもう一度遺跡を巡りたい。

三つ目は知識不足である。今回論文を執筆するにあたって縄文時代について研究を試みたが研究結果が日々更新されており、十年で事実が大きく変わっていることもあった。日々勉強をして縄文時代に対して知識を増やすことが必要である。また、縄文時代だけでなく弥生時代も密接に関係しているため今回あまり学ぶことができなかった弥生時代についてもこれからもっと学んでいきたい。